

鳥取大学所蔵の考古資料（5）  
—鳥取大学・鳥取キャンパスの出土遺物—

高田 健一

Archaeological Collections of Tottori University (5)  
—Artifacts from the Tottori campus of Tottori University—  
TAKATA Ken-ichi

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第20巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 20 / No. 2

令和5年12月22日発行 December 22, 2023

# 鳥取大学所蔵の考古資料（5）

- 鳥取大学・鳥取キャンパスの出土遺物 -

高田健一\*

Archaeological Collections of Tottori University (5)

- Artifacts from the Tottori campus of Tottori University -

TAKATA Ken-ichi\*

キーワード：学校所在考古資料，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，中世土師器，湖山潟

Key Words: Archaeological collections in school, Jomon pottery, Yayoi pottery, Haji ware, Sue ware, Medieval Haji ware, Koyama Lagoon

## I. はじめに

鳥取大学地域学部は，戦前の鳥取県師範学校等にその源流があり，戦後の学芸学部，教育学部などの前身組織から多くの考古資料を引き継いでいる。これらを適切に資料化し，意義付け，公開と保存を図っていくことを目的に，「鳥取大学所蔵の考古資料」と題する報告を本誌上で行ってきた<sup>1)</sup>。今回紹介するのは，鳥取大学鳥取キャンパス出土資料である。

鳥取大学は，戦後の新制大学として米子医科大学，米子医学専門学校，鳥取農林専門学校，鳥取師範学校，鳥取青年師範学校を包括して設置されたもので，医学部，農学部，学芸学部の3学部から出発した。当初は，各前身校や旧陸軍施設などを利用して県内各所にキャンパスが点在したが，やがて1963（昭和38）年に医学部以外の学部を統合移転する計画が持ち上がった。その2年後には，工学部の新設が実現することとなり，農学部，工学部，学芸学部の3学部と教養部の諸施設が鳥取市湖山地区に建設された。

統合移転地となったのは，濃山と呼ばれた総面積およそ400万㎡の丘陵上である。この丘陵上には，前方後円墳を含む有力な古墳群が営まれており，少なくとも江戸時代前期にはその存在が知られていた。また，周辺にもさまざまな時代の遺跡が多く存在する（図1）。一部の古墳は，大学建設工事の際にも保存に留意するよう，地元要望がなされたが（鳥取大学統合移転湖山町対策協議会1966），既に明確な墳丘を失った古墳や，遺物散布地にはほとんど注意が

払われなかったようで，未調査のまま造成工事が行なわれ，最大で28基<sup>2)</sup>とも見積られる古墳群の大部分が破壊されてしまったという（平勢他1986）。

一方，造成工事の際に出土した遺物を収集，保管していた教職員があり，今日まで引き継がれてきたコンテナ3箱分程度の遺物が存在する。また，造成工事中の写真が数葉ある。それらの一部はこれまでも紹介されたことがあるが（豊島他1988），全体像は提示されたことがない。小論では，細片も含め



図1 鳥取大学周辺の主な遺跡

\*鳥取大学地域学部地域学科

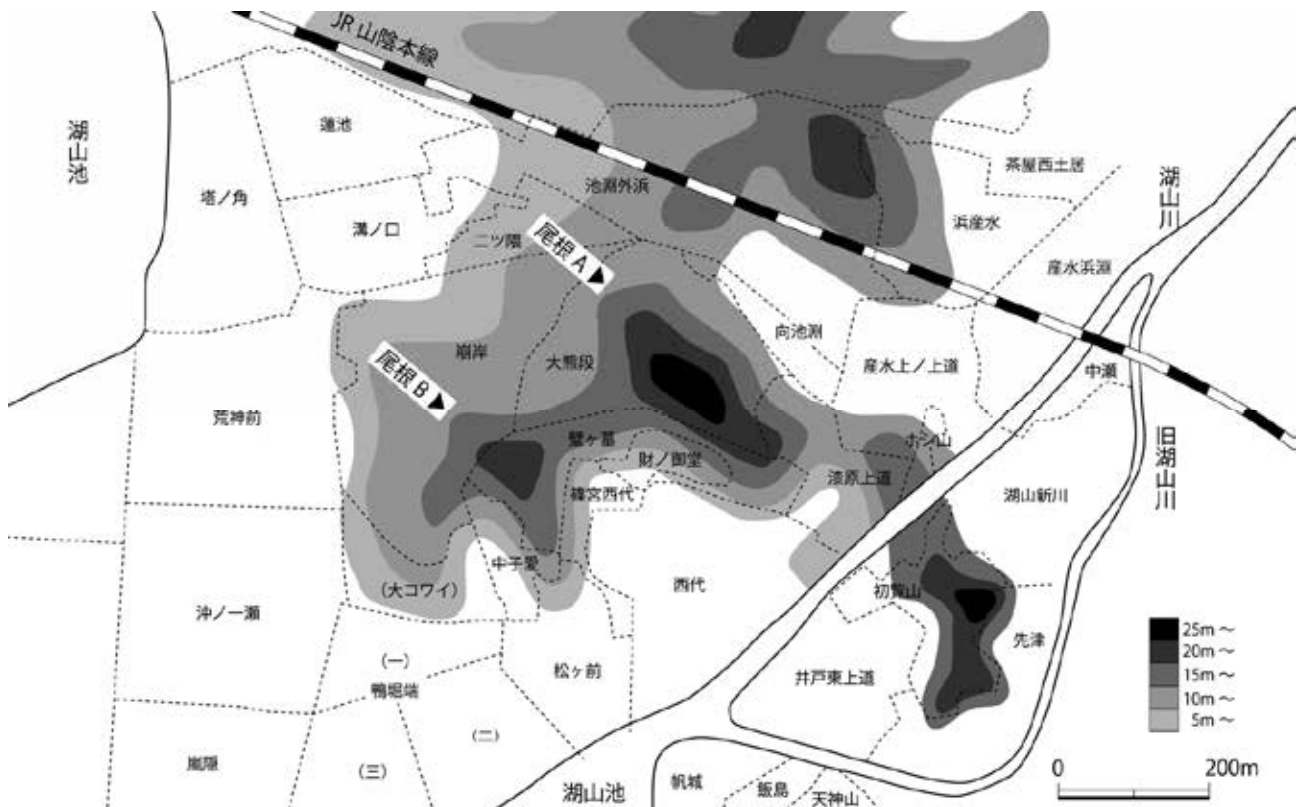


図2 濃山丘陵と旧小字名

て現存する遺物をできる限り図化し、資料提示するとともに、近年までの調査・研究で明らかになってきた湖山池周辺地域の歴史的展開に照らしながら、その位置付けを考えてみたい。

なお、大熊段古墳群、三浦古墳群については、それぞれ出土遺物の再整理作業を進めており、別稿を準備中であるので、ここでは詳しく扱わない。

## II. 旧地形と遺跡群の概要

### 1. 濃山丘陵の概要と遺跡の立地

濃山丘陵は、湖山池の北東岸に位置する、標高10～30mほどの低平な丘陵である(図2)。その地下地質は、約10万年前に形成された湯山砂層(古砂丘)の基盤上に赤褐色古土壌、大山倉吉パミス(DKP)、褐色中部ローム、始良丹沢(AT)火山灰が認められている(豊島他前掲)。これらの更新統の上に完新世に形成されたクロボク土壌が発達しているが、開墾や削平によって未攪乱の状態が残っているところは少ないと思われる。

濃山丘陵の北、概ね現在のJR線より北側は海岸砂丘地帯で、新砂丘の砂層が厚く堆積している。ただし、この地域は全面的に新砂丘のみで形成されているわけではなく、さまざまな建築工事等に伴うボ

ーリング調査を総合すると、4～10mほど下層に黒ボク層が埋没している場所もあり、濃山丘陵と地続きで北側に広がる土地があったと考えられる(星見1990, 2009, 赤木他1993)。砂層に阻まれて遺跡としての認識は十分でないが、賀露第1遺跡や賀露第2遺跡など、海岸部の砂丘地に点在する遺物散布地は、埋没地形に遺跡本体が立地する可能性が高い。

縄文時代中期末頃までは、海岸線は約2km南の桂見付近にあったと考えられるから、濃山丘陵は周辺の丘陵とともに島嶼の一部を成していた時期があると考えられる。周辺の海域が埋積されて陸化が進むのは縄文時代後期以降で、遅くとも弥生時代中期後半までには布勢～天神山城跡付近に伸びる陸繋砂州が形成されていた。ただし、湖山池から旧湖山川が流出する部分は深い谷状地形となっていることが過去のボーリング調査から明らかになっており(田中他2013)、この部分が陸化することはなかったと考えられる。

現状の濃山丘陵は、北西-南東方向に伸びる二つの尾根状地形からなっており、東側が高く、西側にいくにつれて低くなっている。東側の尾根Aは、字「二ツ隈」、「大熊段」、「漆原上道」、「初覧山」にまたがるものである。江戸時代中期の1726(享保11)年に

湖山川の流路を直線化したために丘陵が開削されているが、本来は一連の丘陵と考えられる。

字「大熊段」には、前方後円墳の1号墳と、円墳の2号墳が残されているが、大正期の観察では4基の古墳があったらしい(梅原1924)。また、現在は湖山神社境内となっている「初覧山」には2基の円墳が存在し、北西側の「二ツ隈」にもその名から窺えるように2基の古墳があったらしい。このことから、この尾根上には連続的に営まれた古墳群が存在したと考えられよう。

西側の尾根Bは、字「崩岸」、「躰ヶ墓」、「中子愛」、「松ヶ前」にまたがるもので、ここには、大学移転前に「気六山の琵琶塚」<sup>3)</sup>と呼ばれた「円墳」が存在していた。この琵琶塚は、寛文年間(1661-1673)に作成された『御留場絵図』に描かれた琵琶隈と同一の古墳と考えられる。この古墳は、字「躰ヶ墓」に所在していることが大学移転前の様子を伝える諸資料から知られる。規模は「径八間(14.4m)高さ十五尺(4.5m)を測る可し」(梅原前掲)とされているが、現存する古墳は前方後円墳で、全長36.4m、後円部径19.3m、高さ3.7mを測り、規模と墳形が大きく異なっている<sup>4)</sup>。しかし、「湖岸に近き台地端に位する処」(梅原前掲)という立地や、琵琶になぞらえられた名称などからすると、現在では三浦1号墳(琵琶隈古墳)と呼んでいる前方後円墳に相違ないと考えられる。

前方後円墳を中心とする大型古墳の立地は、このような二つの尾根上にあると考えられるが、その他の古墳は、後述するように、丘陵の縁辺部に沿って立地するように見える。これは、丘陵中央の低平部が早くから開墾され、削平が進んでいたことを反映する可能性もあるし<sup>5)</sup>、丘陵上の土地利用の差に起因するかもしれない。

ところで、図2を作成する際に使用した元図の一つは、大日本帝国陸地測量部が1934(昭和9)年に発行した2万5000分の1地形図「鳥取北部」であるが、地形測量は明治30年測図を基本としている。この明治30年測図は、現在の地理院地図や都市計画図と照らし合わせると、尾根Aの位置が西側に80mほどずれている。また、尾根Bの南西側の舌状の丘陵部が実際よりも60mほど長くなっている点も不正確である。

現実の地形と齟齬がある地図上に、大学移転前に存在した字切図をそのまま重ねると矛盾が大きい。1947(昭和22)年の米軍による航空写真には、濃山

丘陵を鮮明に捉えているものがあり(USA-M184-2-107)、字界を反映すると考えられる道や地形の境、土地利用の差を捉えやすい。1934(昭和9)年「鳥取北部」を基本としつつ、移転時に鳥取大学会計課が1963年に作成した字切図、米軍の航空写真を互いに矛盾が少なくなるように重ねて作成したのが図2である。なお、戦後の字切図には記載がないが、天保期の田畑地続全図に記載がある字名として、「中子愛」に西接する「大コワイ」があり、丘陵裾と思われる部分から低地の水田部分に相当する。尾根B南西側の舌状の張り出し部を米軍による航空写真によって修正すると、ちょうど丘陵裾から低地部分に空白が生じるため、その部分を仮に字「大コワイ」とした。

## 2. 濃山遺跡群の概要

鳥取キャンパス出土遺物の性格を知るためには、濃山丘陵上やその周辺に展開する遺跡を個別に捉えるのではなく、互いに関連する遺跡群と捉え、その全体像を把握しておく必要がある。ここでは、濃山遺跡群と呼称し、これを構成する個別の遺跡として、湖山第1遺跡、湖山第2遺跡、大熊段古墳群<sup>6)</sup>・大熊段遺跡、三浦古墳群・三浦遺跡、中世溝口村跡を視野に入れておこう(図3)。以下、個別の遺跡について、概要を記す。

**湖山第1遺跡** 濃山丘陵の東側、字「漆原上道」に位置する。県道建設工事に伴って発掘調査された(絹見他1989)。古墳時代中期を中心とする集落遺跡であり<sup>7)</sup>、遺構、遺物ともに多いが、古いところでは縄文時代晩期の突帯文土器片が出土している他、弥生時代前期後葉、中期中葉、後期後葉、古墳時代前期後葉の土器片も散見される。新しい時期では、平安時代末頃の土師質土器が出土する土坑や掘立柱建物跡がある。

**湖山第2遺跡** 濃山丘陵の尾根Bの南端部近く、字「松ヶ前」付近が鳥取大学の附属学校建設に先立って調査されている(中村他1982)。事前の試掘調査では尾根筋に当たる部分は遺構が検出されなかったようで、尾根の西側斜面(A区)と、東側斜面(B区)に分けて調査された。A区は弥生時代中期後葉から古墳時代中期前葉までの竪穴式住居跡を中心とする遺構、遺物が検出されている。一方、B区では竪穴式住居跡は検出されず、掘立柱建物跡が中心であるため、土地利用のあり方が異なるようである。弥生時代後期前葉から古墳時代中期中葉の他、平安時代末頃の土師質土器などが遺構に伴って出土している。遺構に伴わない土器はこれよりも幅広く、古

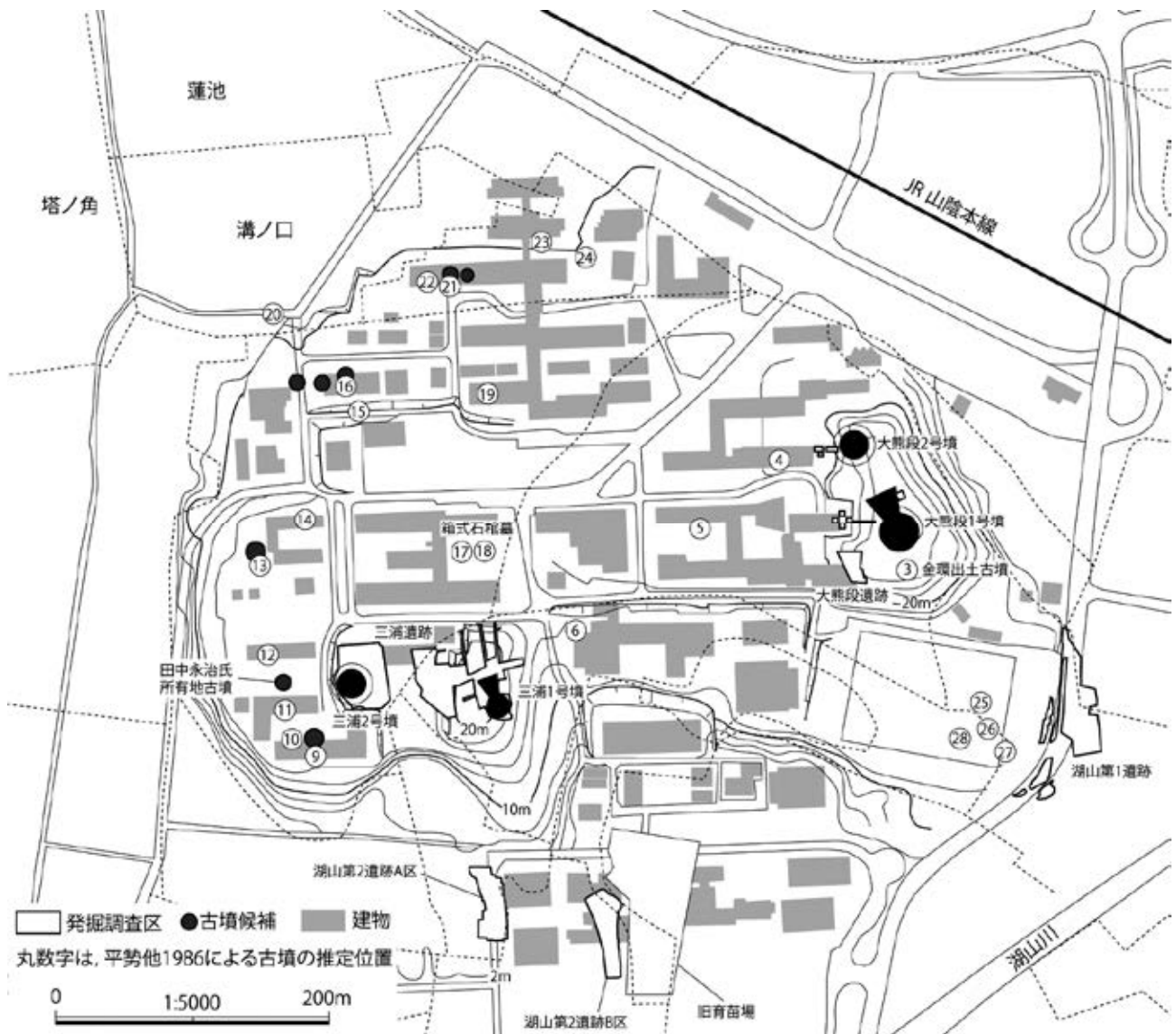


図3 濃山遺跡群の全体像

いところでは、縄文時代中期後葉段階の土器がある他、弥生時代前期後葉から中期前葉段階に位置付けられる土器も出土している。

また、この調査以前に字「西代」から「篠宮西代」付近にあった鳥取大学農学部育苗場造成に伴って発掘調査が行われたようである（治部田 1974）。残念ながら、詳しい報告はないものの、主な出土土器の実測図が中村他 1982 文献に掲載されている。これらの土器の現地性には問題もあるが、濃山丘陵裾部の土地利用の時期幅を示すものとして参考にすることは可能であろう。A 区、B 区にはあまり見られない時期の土器としては、弥生時代前期後葉段階の土器が一定量ある他、古墳時代後期段階の土師器、須恵器、奈良時代の土師器、須恵器が存在する。した

がって、濃山丘陵南の低地部では、地点を変えながら、長期間の土地利用があったと考えられよう。

**大熊段古墳群・大熊段遺跡** 上述したように、濃山丘陵の尾根 A に連続的に営まれた古墳群が存在したと考えられるが、現状では前方後円墳の 1 号墳（全長 45 m）と、円墳の 2 号墳（径 24 m）しか残っていない。古墳群は、現在鳥取市指定史跡として保存されているが、いずれも測量調査と周辺の部分的調査のみで築造時期は十分明らかでない（豊島他前掲）。これまでに知られた出土品による限り、古墳時代後期中葉以降に位置付けられている。

ただし、1 号墳からは最近の発掘調査によって比較的残りの良い円筒埴輪が出土し、突出度の高い突帯など古い要素も看取される（高田他 2020）。調査

は継続中で、遺物整理も途上であるため、ここでは詳述しない。

1号墳の後円部南西側に中世墓が6基以上存在し、その部分は大熊段遺跡と命名されている(平勢1985, 田中1986, 豊島他前掲)。これらは火葬墓で、漆塗木棺を納めた土坑を方形の溝で囲む形式が主流となる。時期は、出土した土器から16世紀中葉～後半と考えられている(八峠2017)。調査範囲は狭小であるため、墓域はさらに広がっている可能性がある。

**三浦古墳群・三浦遺跡**  
尾根 B の最高所に立地する前方後円墳の1号墳(全長37m)のみ現存する<sup>8)</sup>。2号墳(径23m)は、大熊段2号墳とほぼ同じ規模であり、県内ではかなり大きな部類の円墳であるが、古代に削平されたと考えられている<sup>9)</sup>(小谷他1977)。

大熊段遺跡と同様に、調査範囲内に3基の中世墓群が存在する(中村1982)。時期を明確に示す遺物は出土していないが、大熊段遺跡と同様な時期と考えられる。

**その他の古墳群** 鳥取大学移転前の濃山丘陵上に8基の古墳が残存していたことは、土地所有者らの認識として示されている(鳥取大学統合移転湖山町対策協議会前掲)。平勢氏の検討では、古墳の総数は28基に上りうる事が指摘されているが、残念ながら、平勢氏が分析に用いた航空写真は不鮮明で、古墳なのか、単に樹木の群落なのか識別し難いものも多い。一方、1947年の米軍の航空写真は、畑の区画や段差なども比較的鮮明に写っており、複数の方向からの写真が検討できる点も優れているため、指摘された古墳候補の妥当性を検証できる(表1)。

平勢氏が取り上げた28基について、米軍の航空写真で確認したところ、大熊段1, 2号墳、三浦1, 2号墳以外に、No.9, 12, 13, 16, 21, 22の6地点は、墳丘をもつ古墳として認定できそうである。特に、

表1 濃山古墳群の検討

| 番号     | 平勢1986による判定※ |                  | 米軍写真 | 出土遺物                 |
|--------|--------------|------------------|------|----------------------|
| No. 1  | 現存           | 大熊段1号墳           | 見えない | 鉄鏃, 鉈等(所在不明)<br>円筒埴輪 |
| No. 2  | 現存           | 大熊段2号墳           | 見えない | 円筒埴輪                 |
| No. 3  | A            | ダブルマウンド          | 見えない | 金環(所在不明)             |
| No. 4  | A            | 前方後円墳            | ×    |                      |
| No. 5  | B            |                  | ×    |                      |
| No. 6  | B            |                  | ×    |                      |
| No. 7  | 現存           | 三浦1号墳            | ○    | 円筒埴輪, 形象埴輪, 須恵器      |
| No. 8  | 嘗存           | 三浦2号墳            | ×    | 装飾付須恵器               |
| No. 9  | A            | 工事後土器散布          | ○    |                      |
| No. 10 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 11 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 12 | A            | 田中永治氏所有地, 『因伯二國』 | ○    | 土師器高坏, 壺(所在不明)       |
| No. 13 | A            |                  | ○    |                      |
| No. 14 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 15 | A            |                  | ×    |                      |
| No. 16 | B            |                  | ○3基? |                      |
| No. 17 | A            | 箱形石棺(底石あり)       | ×    | 管玉2個(所在不明)           |
| No. 18 | A            | 箱形石棺(底石なし)       | ×    | 脚付角形把手付椀             |
| No. 19 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 20 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 21 | A            | 字「二ツ隈」           | ○    |                      |
| No. 22 | B            |                  | ○    |                      |
| No. 23 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 24 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 25 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 26 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 27 | B            |                  | ×    |                      |
| No. 28 | B            |                  | ×    |                      |

※ Aは、古墳の「可能性が極めて濃い」、Bは、古墳という「想定に不安がないわけではない」

No.9は工事中に土器散布の証言があった場所であり、No.13はマウンド状の盛り上がりが見え、径16, 7mの円墳の可能性が非常に高い。No.21も10m程度と規模は小さいながら、円墳の可能性が高いと判断しうる。No.12は、梅原1924文献で、田中永治氏所有地の古墳とされたもので、箱形石棺から土師器が出土したと報告(梅原1922)されたものであるが、戦後でも墳丘の形骸は残っていたとみられる。

一方、No.16付近は三つの丸い影を確認でき、いずれか、あるいはいずれも樹叢などかもしれないものの、確度AとされたNo.15が付近に存在することから、古墳である可能性は捨てがたいと思われる。

移転前後の航空写真や証言等を利用した検討ではこのあたりが限界である。丘陵の西側は、縁辺部に古墳が並ぶように分布するが、所詮は20世紀前半までに削平を免れた状況にすぎないかもしれない。さらに詳しく古墳の検討を進めるためには、構内全域の試掘調査が不可欠であるが、まずは、旧地形がど

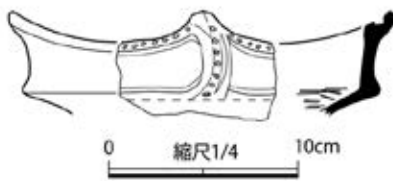


図4 縄文土器

の程度残存しているのかを把握することから始めなければならないだろう。

**溝ノ口村跡** 中世溝ノ口村は、上述の『御留場絵図』に「溝ノ口ノ跡」と記された集落である<sup>10)</sup>。この村については、文献と絵図から錦織勤氏によってその性格が追究されている(錦織 2010a, 2013)。

15世紀後半には、因幡山名氏によって天神山に因幡守護所が設けられ、因幡の政治的な中心地となった。この地に守護所が設けられた理由の一つは、その南に位置する布勢(布施)が平安時代以来宗教的・商業的な拠点として人々を惹きつけていたことがある(錦織 2010b)、その地理的背景として、湖山池の北側に海とつながる水路が存在し、単なる池ではなく潟湖であったことが注目されている。溝ノ口村はその水路に近接した地の利があり、山名氏が発給した文書や、真宗門徒の消息を示す文献(『本福寺門徒記』)などから、やはり商業的に繁栄した集落と考えられている。字「溝ノ口」、「蓮池」、「塔ノ角」には、新砂丘砂層に埋もれた中世集落跡が埋没している可能性が高い。

また、濃山丘陵上の中世墓群は、年代的な一致から、溝ノ口村住人のものである可能性が考えられよう。

### Ⅲ. 弥生時代以前の遺物

#### 1. 縄文時代の遺物

これまで、湖山第2遺跡では縄文時代中期段階の遺物、湖山第1遺跡では縄文時代晩期の突帯土器片が出土しているが、量は少ない。丘陵上の採集遺物も知られているのは1点しかない(図4)。

これは、「大学会館からプールにかけて」の場所で、造成工事中に採集されたものという。旧字名では「壁ヶ墓」から「篠宮西代」となるが、造成工事中ということは丘陵上と考えられるから、前者の可能性が高い。4山の波状口縁で、口縁端部に刻み目を施した隆帯を施す。波頂部からノ字状の隆帯が垂下され、この隆帯にも刻み目が施されている。隆帯の内側は沈線で区画され、区画内は磨きが施されている。また、波頂部突起は外方に拡張され、上面には巻貝の殻頂部によると思われる刺突文が施されている。このような特徴から、後期中葉後半の権現山式新段階

の深鉢口縁部と考えられる(柳浦 2017)。なお、口径は20.0cm、残存高5.7cmを測る。

縄文時代後期中葉段階には、湖山池南岸地域に多数の遺跡が立地するようになる。このことは、内湾・潟湖周辺に成立した多様な生態系が居住地としての魅力を高めたと理解されているが(濱田 2019)、本資料は、活動拠点の範囲が湖山池南岸に限られなかったことを示す点が重要と言えよう。

#### 2. 弥生時代の遺物と出土地点の検討

弥生時代の遺物としては、23点を図化した(図5)。これ以外にも胴部片など実測しなかった破片が多数存在する。端部がない小片が多いため、時期比定が難しいものもあるが、文様や調整技法によってある程度推測が可能な資料を選択して図化した。

前期に属すると考えるのは、図5-1, 2, 11~13, 15~17で、いずれも前期後葉段階(I-3~4期)の破片と考えられる。1, 2, 11, 12は広口壺の口縁部片と考えられる。1は、口縁端部に棒状工具先端による刺突文を連続的に施し、2は、へら状工具先端による刺突文を矢羽状に施すものである。11は口径16.2cm、残存高3.5cmを測る破片で、12も口径16.2cm、残存高5.5cmを測る。13は刻み目突帯を数条にわたって貼り付けた壺の肩部~胴部片、15~17は多条沈線を施した甕ないし壺片の可能性が高い。

中期に属するのは、図5-3, 4, 20である。3は小片であるが、如意形口縁の甕口縁部片と思われる。単純な素口縁であることから中期中葉古段階(III-1期)に属するものであろう。4は、口縁を折り曲げて下方に垂下する大型器台(もしくは広口壺)の口縁部片であろう。外面に4条の凹線文を施し、凸部にはへら状工具先端による刻み目を矢羽状に施し、さらに円形浮文を貼り付ける。中期後葉新段階(IV-3期)に位置付けられよう。20は、底径6.2cm、残存高2.8cmを測る底部片である。外面に幅広の縦方向のミガキが認められるため、中期中葉~後葉段階の壺ないし甕の可能性が高い。

後期に属するのは、図5-5~9でいずれも複合口縁甕の口縁部片である。立ち上がりの高さや擬凹線の条数から、いずれも後期中葉段階(V-2期)に類例が多いものである。1点のみであるが、終末期後半段階(VI-2期)と考える複合口縁甕の口縁部片もある(10)。

これらの多くは、「鳥取大学南側グラウンド拡張工事中、中川誠教官<sup>11)</sup>により採集された遺物」と書かれた紙と一緒に保管されていたものである。「南側グ

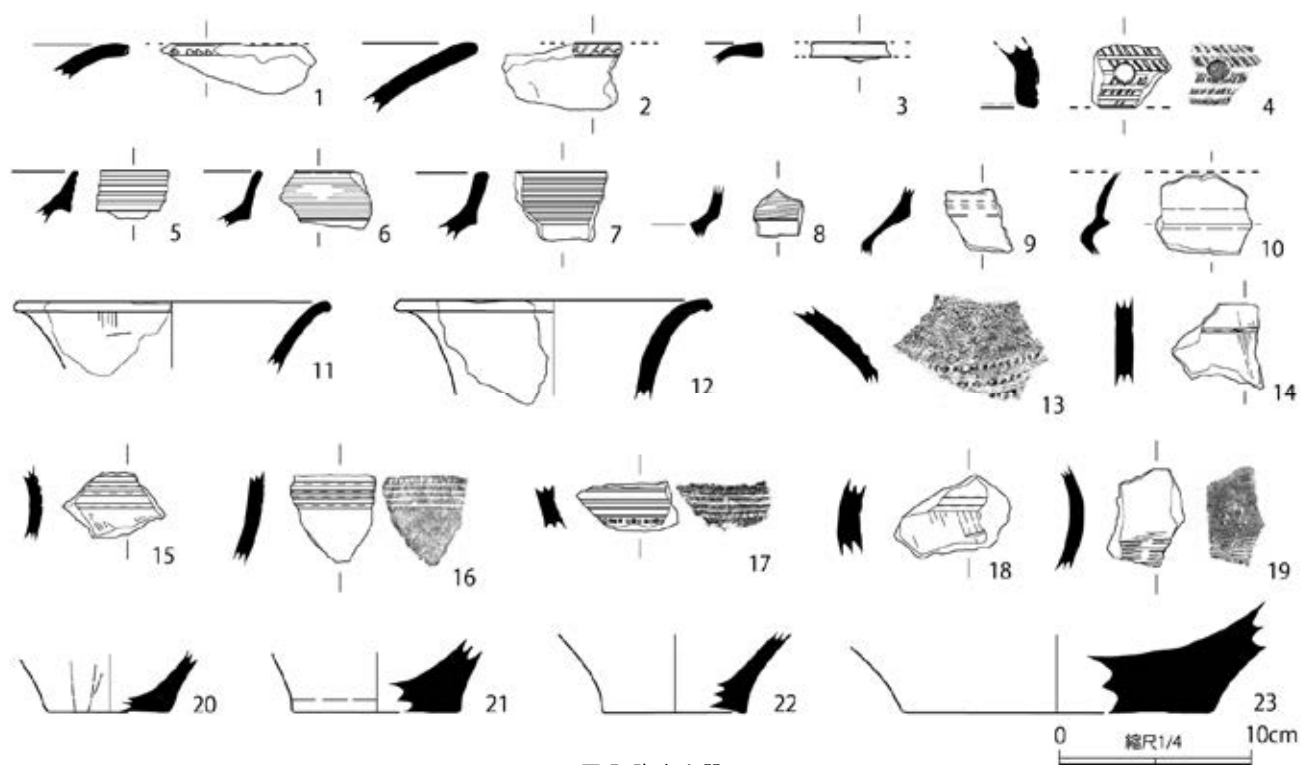


図5 弥生土器

ラウンド」とは、湖山第1遺跡の西側に隣接し、字「漆原上道」から「壁ヶ墓」にまたがる部分で、現在はテニスコートになっているが、かつてはここがグラウンドであった。拡張工事の実態はよくわからないので、どの部分が削平された結果かわからないが、尾根A南西部に弥生時代遺跡が展開していたと考えられよう。1980年代の大熊段遺跡の調査の際にも、後期後葉段階の甕口縁部片が見つかった（平勢前掲）、湖山第1遺跡でも同様な時期の土器片が出土している（絹見他前掲）。

また、「種苗場」と書かれたカードとともに保管されていた土器片が13片ある。「育苗場」と同一地点と見て良く、字「西代」から「篠宮西代」にかけての場所で採集されたものと考えられる。これらは、いずれも胴部片であるため、図化しなかったが、細密なハケメを施す点や、やや太い縦方向のミガキが施された点を勘案すると、弥生時代中期中葉頃の甕であろうと推測できる。これまでに報告された資料には少ない時期の土器であるが、中期段階に途切れることなく人間活動が継続していることを示す点で重要であろう。

丘陵裾の低所では中期後葉までの遺物が多く、丘陵上では、相対的に後期中葉～後葉の土器片が目立つように思われる。このことは、後期における居住域の高所移動として、県内の各所で知られた現象を

示しているのであろう（久保1990、濱田2006）。ただし、前期～中期の土器片も散見されることからすると、弥生時代を通じて丘陵上の土地利用がさまざまな形で継続していたと考えられよう。

その土地利用形態の一つとしては、当然、墓地もありうるが、現在のところその手がかりはほとんどない。居住域付近の丘陵先端部が墓域となる事例が多いことからすると、三浦1号墳の南側はその有力な候補地と言える。また、弥生時代後期の土器片が出土した実績からすると、大熊段1号墳が立地する丘陵も、引き続き注意が必要なエリアであろう。

#### IV. 古墳時代の遺物

##### 1. 土師器

古墳時代の遺物としては、土師器10点、須恵器6点を図化した（図6）。

土師器は、前期に位置付けられるものとして、甕口縁部片（1）、鼓形器台口縁部片（3）、高坏脚部片（5）、低坏脚部片（8）がある。1は、口径31.4cm、残存高5.4cmを測る大型の甕である。口縁端部に面があり、一次口縁の稜が鋭く突出する。3は、口径16.4cm、残存高5.5cmを測る鼓形器台の口縁部片である。内面にはやや幅広な横方向のミガキが施されている。5は、小型の高坏脚部で、底径12.2cm、残存高2.6cmを測る。内面に比較的細密なハケメを施



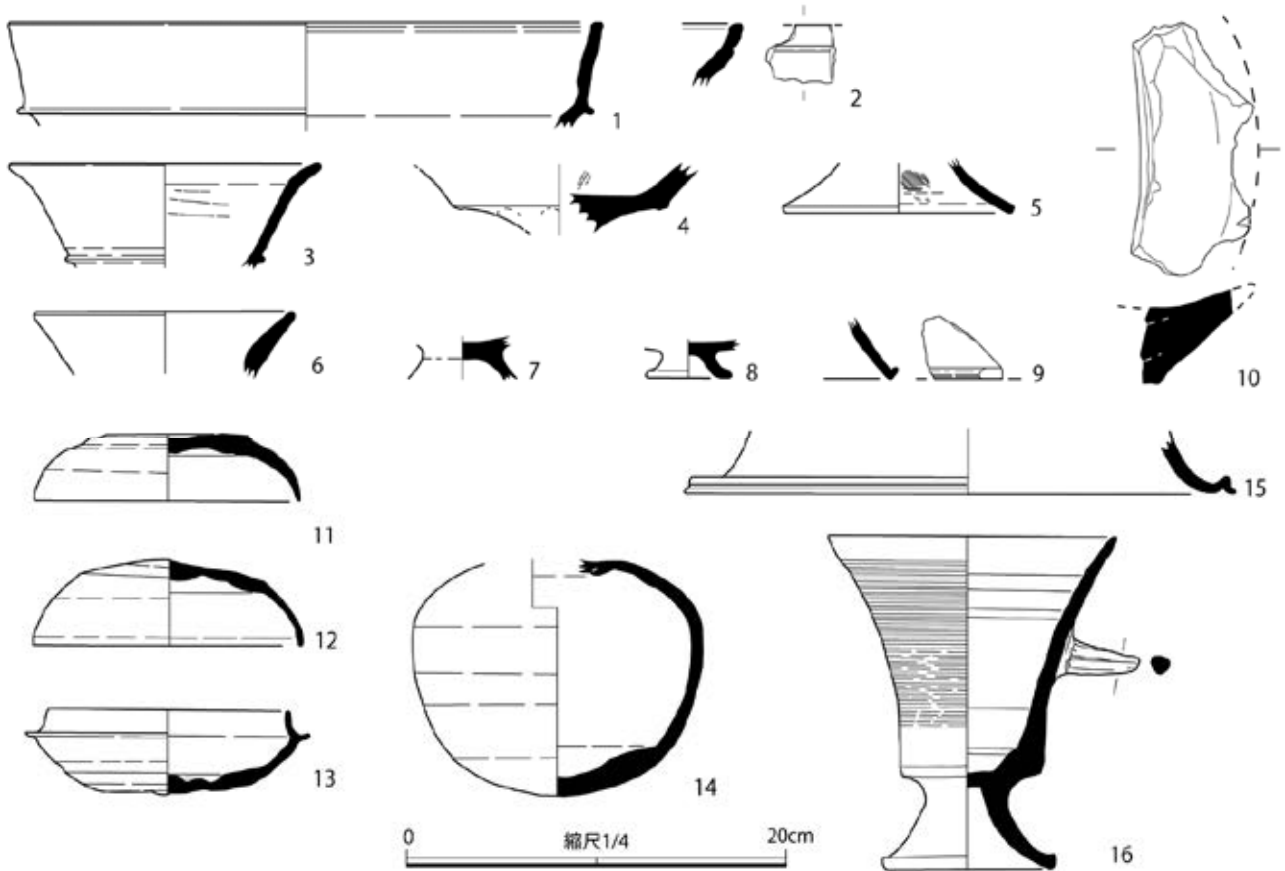


図6 土師器・須恵器

したのち、底部縁辺部はナゲ消している。脚端部は面をもつ。8は、低脚杯の脚部で、底径4.5cm、残存高2.0cmを測る。全体の保存状態が悪く、表面は摩滅している。

図6-1, 3, 5は「南側グラウンド」出土品の中にあつたものであるが、8は「鳥大7/9 '79 L21」という注記があるものの、出土地点は不明である。中川氏採集資料とは別の時期に採集されたものであろう。1は、古墳時代前期前葉に遡りうる特徴をもつが、3, 5, 8は前期中葉以降に降るものであろう。

古墳時代中期の遺物としては、甕口縁部片(2)、高坏坏部片(4)がある。2は、口径が復元できない小片であるが、やや内湾する形態、口縁端部が若干肥厚して内側に面をもつ点などから、布留式系甕の系譜上にあると理解できる。一方、外面に一条の沈線が施されるのは、形骸化した複合口縁に見られることがある技法で、岩吉編年のⅦ期段階(古墳時代中期中葉)に類例がある。4は、内外面ともに赤色塗彩したもので、坏部内面に放射状の暗文で施す。これも2と同じ段階、古墳時代中期中葉あたりに位置付ける。

古墳時代後期以降に降ると考えられる土師器は、甕口縁部(6)、脚部片(7, 9)と、移動式竈の底片(10)がある。6は、口径15.6cm、残存高3.4cmを測る。外面を赤色塗彩した痕跡を残すが、摩滅が著しく、調整技法などは不明な点が多い。7は、脚基部の径が4.6cm、残存高2.2cmの高坏と考えられる土器の一部である。9もまた高坏の脚部と考えられる破片であるが、小片のため径を復元しがたい。脚端部を斜め上方に折り返す特徴は、通有の土師器高坏には見られない技法であるが、須恵器高坏の模倣である可能性も考慮しておこう。

10は、移動式竈の底片と考えられるもので、現存長13.2cm、幅4.8cmを測る。厚さ約2cmの粘土板を用い、本体に貼り付けるための補強粘土が上下に付属している。平面図の右側には、底の端部が残存する部分があり、円弧を描くように復元できる。左側は本体から剥落した痕跡がある。底の上面と下面はナゲ調整が施されているが、焚口の部分はケズリによって面取りが施されている。

## 2. 須恵器

須恵器は、いずれも古墳時代後期でも後半以降に

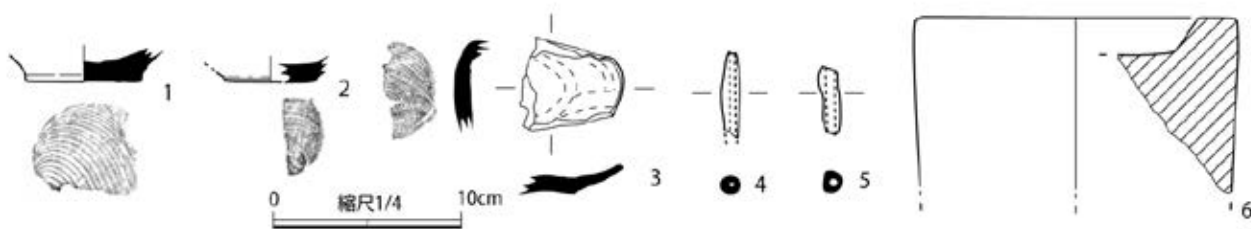


図7 土師質土器など

下る段階のものである。11は、口径14.0cm、高さ3.6cmの坏蓋である。天井部外面は、径6cmほどの範囲でヘラ切り痕を残すが、その外周の幅1cmほどの範囲のみヘラケズリを施している。口縁部は薄く伸ばすのみである。外面および内面に赤色顔料が付着するが、内面は広い範囲に厚く付着する。おそらく、箱形石棺のような埋葬施設内で被葬者の頭部安定用の枕に転用されており、内面を頭骨側に向けていたのであろう。「移転時 S40」の注記があるから、1965年の造成工事に出土したものであろう。詳しい出土地点はわからないが、可能性としては農学部棟横のNo.17, 18地点(図3, 表1)の箱形石棺内が想定される。

12は、口径14.2cm、高さ4.5cmの坏蓋である。天井部の約1/4の範囲を反時計回りに回転ヘラケズリし、口縁端部内面に1条の浅い沈線を入れて段を作り出す。外面に薄く赤色顔料が付着する他、口縁付近の一部に白色の物質が付着している。やはり「移転時 S40」の注記がある。11と共伴したかどうかはわからないが、内外面の付着物の色調はよく類似しており、同一遺構内出土品としても違和感はない。11, 12は、陶邑編年のTK43~TK209型式の段階、6世紀後葉~末に位置付けられよう。

13は、口径12.6cm、高さ4.5cmの坏身である。外面の約1/4の範囲を反時計回りに回転ヘラケズリする。口縁部の立ち上がり角度は約25°、立ち上がり高は1.3cmである<sup>12)</sup>。口縁端部は丸く収めている。口縁形態は、陶邑編年のMT85型式の範囲に収まるが、坏部内面は粘土紐の巻き上げ痕跡を残し、平滑ではなく雑な仕上げである。注記はないが、内外面に薄く赤色顔料が付着する他、13に付着するのと同様な白色物質も広い範囲で付着している。類似した埋蔵環境にあったものと思われる。陶邑編年のMT85~TK43型式の段階、6世紀中葉~後葉と考えられる<sup>13)</sup>。

14は、球形胴を呈する壺形の土器であるが、中心からややずれた位置に外付け口縁を接合するための

剝抜孔痕が残るので、平瓶と考えられる。胴部最大径15.5cm、現存器高12.9cmである。底部付近にタタキメを残すが、内外面ともに丁寧なナデを施す。

15は、高坏の脚部で、底径14.3cm、残存高3.8cmある。底径の大きさから、長脚の高坏と推測でき、古墳時代後期後半に位置付けられよう。色調は明るい灰色を呈し、11~13とは焼成が異なっている。

16は、脚付角形把手付椀である。口径15.0cm、高さ17.6cmを測る。農学部棟横のNo.17, 18地点にあった箱形石棺のいずれかから出土したものらしい。坏の身部外面にカキメが施されているが、厚く自然釉が被っており、下半部では薄れている。また、口縁部のやや下方に他の須恵器片(脚端部か口縁端部)が融着している。おそらく、焼成台として用いられたものであろう。このような角形把手付椀については、横山聖氏が鳥取県内の事例22遺跡24点を集成し、古墳時代後期中葉から終末期にかけての類例が多いこと、因幡地方に分布が集中することなどを示した(横山2018)。また、亀田修一氏は、このタイプの土器は朝鮮半島南部地域との関わりが強く、全国的にみても因幡の事例の多さが際立つという(亀田2023)。濃山古墳群の被葬者像や交流範囲を考える時に重要な手がかりになると考えられよう。

## V. 古代以降の遺構と遺物

### 1. 古代・中世の遺物

図7-1~3は、土師質土器の皿である。いずれも底部に回転糸切り痕を残す。1, 2は底部のみで、それぞれ径6.2cm、径5.0cmを測る小型品である。「南側グラウンド」における採集品である。

3は口縁部を内側にU字形に折り曲げたもので、耳皿の可能性もある。復元口径は9.8cmを測る。耳皿は、式三献のような儀礼的な飲食の際に箸置きとして用いられる土器である。これまで、濃山丘陵上で出土した土師質土器は、いずれも中世墓に伴うものであったが、これが耳皿とすれば、墓だけではなく、生者が活動する場が存在した可能性を示唆する

だろう。「財ノ御堂」といった建物の存在を推測させる字名も存在することから、中世遺跡の性格については、墓地遺跡だけにとらわれないように注意が必要であろう。

4, 5は管状土錘である。それぞれ残存長 4.6 cm, 径 1.0 cm, 孔径 0.3 cm, 残存長 3.7 cm, 径 1.1 cm, 孔径 0.5 cm を測る。同様な管状土錘は、丘陵裾の「育種場」でも多数採集されている他、湖山第 1 遺跡からも出土している。中世溝ノ口村は、守護山名氏によって湖山池北東部での漁業権が保証されていた。これら管状土錘は、湖山池における漁労活動の一端を示すものであろう。

6 は、砂岩製の石臼の上臼である。破片が 2 片あり、接合する。径 16.2 cm, 残存高 9.3 cm を測る。大きさや石材からすると、茶臼である可能性が高い。年代は不明であるが、これも丘陵上の人間活動の多様性を示唆する遺物であろう。

なお、3~6 は「移転時」と書かれたコンテナ内に入っていたもので、3 には L5, 4 には L15, L16 といった注記が施されているが、その意味は不明である。

## 2. 近世～近代における濃山

濃山遺跡群の考古資料として、確実に近世以降のものほとんど存在しない。この背景として、因幡守護所であった天神山城が、因幡山名氏と但馬山名氏の守護職継承権争いの末に永禄 3 (1560) 年に廃城されたため、16 世紀末以降、この地域の政治的重要性が大きく低下したことが一因と考えられる。

また、中世末～近世初頭になると、湖山砂丘の形成が活発化し、北岸で日本海と繋がっていた水路は埋没してしまう (錦織 2010a)

このような歴史的、自然環境的变化によって濃山遺跡群周辺の人間活動が低下し、丘陵上は自然の山野に戻っていったと考えられる。17 世紀後半段階では、溝口村の場所も正確には伝承されていなかったことが『御留場絵図』からは窺える。ただし、濃山丘陵の東側にあった宇文 (産水) 村は近世村落として存続しており、濃山丘陵はその入会地として機能していたようである。いずれにせよ、近世における人間活動の実態は、考古資料の面からはよくわからない。

近代以降も考古学的に検討できる内容は乏しいが、大学移転以前の土地利用として、畑地の開墾や造成行為が遺構または土層として認識できると考えられる。ただし、実際に発掘調査で検出できる遺構としては、アジア太平洋戦争中に松根油採取を目的とし

た掘削が盛んに行われており、大熊段遺跡などで不整形な土坑が多数見つかっている。筆者らが実施している大熊段 1 号墳の発掘調査でも、墳丘裾部を破壊する削平は、松根の掘削痕の可能性が高い。

## VI. 地域史における濃山遺跡群

ここで紹介した遺物は、出土地点の詳細も不明な破片資料で、必ずしも良好な考古学情報をもつものとは言えないが、湖山池北岸地域の人間活動を伝える重要な手がかりとなるものである。これまで、湖山池の南岸地域では、山陰を代表するような重要遺跡が集中する様子が多年にわたる発掘調査の蓄積によって明らかにされてきた。例えば、縄文時代の桂見遺跡、弥生時代の西桂見墳丘墓、古墳時代の桂見古墳群などは、湖山池南岸地域が各時代における経済的・文化的中心地であり、交通の結節点としての役割を果たしてきたことの反映とみなされてきたのであるが、その背景には、湖山潟がもたらす港湾機能が常に想起されてきた。

その一方で、その湖山潟の入り口に当たる濃山丘陵周辺地域は、鳥取大学移転時にきちんと発掘調査されなかったこともあって、その歴史的な位置づけが十分には追究されてこなかったように思われる。

濃山丘陵の立地を考えると、北は外洋の日本海に、南は湖山潟内水面に面したウォーターフロントの拠点としての役割を考えることができる。現在、JR 線より北側は市街化してその面影は薄れているが、近世～近代にかけては広大な海岸砂丘地帯が広がっていた。しかし、それは 17 世紀以降に形成された比較的新しい地形で、中世以前に遡ると、濃山丘陵の北側は入江状に海が入り込んでいた時期があり、現在とは全く異なる景観を呈していた。そのことを復元しなければ、遺跡の性格を正しく知ることはできないと考えられる。

今、出土遺物の示す時期を整理すると、①弥生時代前期後半、②弥生時代中期中葉～後葉、③弥生時代後期中葉～後葉、④古墳時代前期後葉～中期前葉、⑤古墳時代後期後葉、⑥中世中期～後期というように、長期にわたって、間欠的に人間活動が活発化する様子が看取できる。そして、これは、県内の海岸砂丘に立地する遺跡の盛行時期とも一致する部分が多いのである。

例えば、鳥取市福部町の直浪遺跡では、②、③、④、⑤、⑥の時期にクロスナ層や多くの遺物が出土する包含層が形成されており、海岸砂丘地帯が人間

活動の舞台になっていたこと示す(高田他 2018)。また、湯梨浜町長瀬高浜遺跡(鳥取県教育文化財団 1981~1983, 八峠他 1997, 牧本他 1999 など)や米子市博労町遺跡(濱野他 2011, 高橋他 2022)でも、時期的にずれる部分はあるが、やはり②, ③, ④, ⑤, ⑥の段階に多くの遺構, 遺物が確認されている。

つまり, 自然環境や古気候の変化によって海岸部の砂丘地帯が利用可能な土地に変化するとき, 砂丘やその縁辺部に立地する遺跡が活性化するのである。濃山丘陵遺跡群もまたそのような臨海性の遺跡の性格をもつとみれば, ささまざまな出土品や古墳築造の背景もより深い理解が可能となってくる。

広い範囲が削平された鳥取大学構内で, 有意義な調査が可能な地点は限られているが, 問題意識を持った調査を可能な限り進めていくべきであろう。小論は, やがて訪れる機会のための基礎作業である。

#### 註

- 1) これまでの報告については, 鳥取大学研究成果リポジトリ (<https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/ja>) を参照されたい。
- 2) 平勢隆郎氏は, 資料的な制約が多い中でも, キャンパス移転前の航空写真や移転当時の教職員への聞き取りなどから古墳群の復元を試みた。全部で 28 基の候補を挙げたが, 確実度が高いとされたものは 9 基である。
- 3) 気六山とは, 土地所有者の片岡気六氏の名に由来する。その孫の気録氏(1900-1975)は, 長く湖山小学校の校長を勤めた人物で, 湖山地区の地誌編纂に深く携わって地域史にも明るい人物であった。鳥取大学の湖山地区移転について, 実務を担った一人でもあり, おそらく, 琵琶隈古墳の保存に意を配った人物と考えられる。
- 4) 現状の墳丘形態と規模は, 1981 年度に実施された農学部棟増築工事に伴う発掘調査の際に, 「修復」として前方部に盛土が付加された後のものである(中村他 1982)。「修復」前の姿は, 測量図や写真で見ると, 前方部の大部分が低平に削られ, 一部が 1 m ほどの高まりを残す状態であった(小谷他 1977)。墳形の認識の差は, 前方部が大きく削平を被っていたことによると思われるが, 規模の差が大きいことの原因はよくわからない。報告執筆者の梅原末治自身が古墳を現地確認しておらず, 地元委員からの伝聞によって規模を記載した可能性も考えるが, 大正期以降に後円部も削平を被って規模が変わったという可能性も考慮しなければならない。いずれにせよ, 正確な墳形と規模については, 改めて発掘調査による検証が必要であろう。

- 5) 天保年間(1830~1844)に作成された高草郡湖山村田畑地続全図によると, 濃山丘陵の大部分は林地であるが, 字「大熊段」の西側と字「財ノ御堂」は畑が営まれており, 少なくとも江戸後期には丘陵上の開墾が行われていたと考えられる。なお, 絵図に古墳の存在は記されていない。
- 6) 同一丘陵上の古墳群の名称を, 大熊段古墳群と三浦古墳群に分ける合理的な理由はない。本来ならば, 平勢隆郎氏が提唱するように, 濃山古墳群として一括して新たな番号を付すべきかもしれないが, 多様な呼称が乱立するのを避け, ここでは旧来の名称を使用する。
- 7) 報告書では, 堅穴住居の時期を中期末~後期初頭と位置付けているが, 内実は岩吉編年(谷口他 1991)のⅦ段階~Ⅷ段階に相当すると考えられ, 中期前葉~中葉段階が主流と考えられる。
- 8) 「三浦古墳」命名の経緯は, 概ね次のとおりである。鳥取大学移転前から「琵琶塚」ないし「琵琶隈」の名称で古墳と認知されていたが, 遺跡地図への登載は鳥取大学移転後となった。移転の際, 大学敷地内の地名表記を一括して「鳥取市湖山町三浦」に変えたようである。「三浦」は, 湖山への統合移転を果たした学長・三浦百重氏の姓であり, その功績を記念して住所にその名を用いたのであった。字名を遺跡名に用いる原則によって, 三浦古墳として遺跡地図・台帳に登載されることとなったが, その後, 農学部の校舎拡張工事に伴って三浦古墳周辺の試掘調査が行われると, 削平された円墳の周溝が見つかり, それを三浦 2 号墳と呼ぶとともに, 前方後円墳の方を三浦 1 号墳と呼び替えたのである。
- 9) 三浦 2 号墳の墳丘削平面から奈良時代の須恵器坏身片が出土したことによって, 奈良時代の削平が想定されている。しかし, 須恵器片は小片であり, 1 点しかない。墳丘を完全に破壊するような開拓が奈良時代に行われたと考える証拠は十分でないため, 削平の年代は古代~近代までの幅広い時間幅の中で捉えておくのが妥当であろう。
- 10) ただし, 絵図における溝口村は, 描かれた地形と古墳の位置からすると, 字「西代」辺りに伝承されているようだ。
- 11) 中川誠氏は, 1970 年代に鳥取大学教養部に在籍していた近代イギリス文学の研究者である。
- 12) 立ち上がり角度は, 植田隆司氏(2012)が提唱する方法, すなわち, 杯身正置状態の鉛直方向を 0° とし, 口縁の立ち上がり外面基部と端部を結んだ直線までの角度を図上で計測した。
- 13) 図 6-11~13, 16 は, 豊島他 1988 文献に実測図が掲載さ

れたものであるが、再実測した図を掲載した。同文献では、12, 13 を蓋と身のセットのように配置するが、実際には組み合わない。

## 文献

- 赤木三郎 1993 「湖山池の地質環境と地史的変遷」『地質学論集』第 39 号, pp.103-116
- 植田隆司 2012 「古墳時代須恵器編年の限界と展望」『龍谷大学考古学論集 II—網干善教先生追悼論文集—』龍谷大学考古学論集刊行会, pp.129-146
- 梅原末治 1924 『因伯二国に於ける古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告第 2 冊
- 亀田修一 2023 「古墳時代の山陰と朝鮮半島」『先史・古代の日韓交流の様相—山陰を中心として—』第 50 回山陰考古学研究集会事務局, pp.22-69
- 久保穰二郎 1990 「弥生時代の集落立地について—鳥取平野とその周辺の場合—」『鳥取県立博物館研究報告』第 27 号, pp.7-18
- 小谷仲男・豊島吉則・久保穰二郎 1977 『三浦古墳—鳥取大学構内における考古学遺跡の調査 I—』鳥取大学
- 絹見安明・森脇廣行・原田雅弘 1989 『湖山第 1 遺跡』鳥取県教育委員会・財団法人鳥取県教育文化財団
- 治部田史郎 1974 「三浦団地遺跡について」『郷土と博物館』第 19 巻第 2 号, 鳥取県立博物館, pp.1-5
- 高田健一・別所秀高・渡邊正巳・中原 計 2018 『直浪遺跡の研究—砂丘遺跡における人間活動と古環境変動に関する考古学的研究—2015 年度～2017 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書』鳥取大学地域学部
- 高田健一・中原 計 2020 『大熊段 1 号墳—第 1 次発掘調査の概要—』鳥取大学地域学部考古学研究室
- 高橋浩樹・京嶋 覚 2022 『博労町遺跡 II』財団法人米子市教育文化事業団
- 谷口恭子・前田均 1991 『岩吉遺跡 III』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
- 田中 慎・矢野孝雄・田中優一・野村あずさ 2013 「鳥取県東部千代川の河成段丘—段丘比高にもとづく第四紀後期の鉛直地殻変動—」『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第 10 巻第 1 号, pp.103-127
- 田中精夫 1986 『大熊段遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県教育文化財団 1981～1983 『長瀬高浜遺跡 III～VI』財団法人鳥取県教育文化財団
- 鳥取大学統合移転湖山町対策協議会 1966 『湖山のあけぼの』
- 豊島吉則・平勢隆郎・久保穰二郎・原田雅弘 1988 「鳥取大学構内出土の遺物」『鳥取大学教育学部研究報告』（人文・社会科学）第 40 巻第 2 号, pp.81-138
- 中村 徹・坂本敬司・津川ひとみ 1982 『湖山第 2 遺跡発掘調査報告書』財団法人鳥取県教育文化財団
- 中村 徹 1982 『三浦遺跡—鳥取大学構内における考古学遺跡の調査 II—』鳥取大学・財団法人鳥取県教育文化財団
- 錦織 勤 2010a 「因幡国布施・溝口の中世—湖山「瀧」の発見—」『鳥取地域史研究』第 12 号, pp.3-17
- 錦織 勤 2010b 「布施の『舟入』と因幡国守護所天神山城の構造」『地域学論集』第 6 巻第 3 号, pp.349-361
- 錦織 勤 2013 『古代中世の因伯の交通』鳥取県史ブックレット 12, 鳥取県
- 濱田竜彦 2006 「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態—大江山麓・中海南東岸地域を中心に—」『古代文化』VOL.58-II, 財団法人古代学協会, pp.82-95
- 濱田竜彦 2019 「山陰地方の縄文時代遺跡群と集落像」『縄文文化の繁栄と衰退』雄山閣, pp.229-252
- 濱野浩美・平木裕子・佐伯純也 2011 『博労町遺跡』財団法人米子市教育文化事業団
- 平勢隆郎 1985 『大熊段遺跡 G 区発掘調査報告書』鳥取大学
- 平勢隆郎・豊島吉則 1986 「「濃山古墳群」とその環境—航空写真による鳥取大学構内古墳群の予備的考察—」『鳥取大学教育学部研究報告』（人文・社会科学）第 37 巻第 1 号, pp.25-50
- 星見清晴 1990 「湖山池の形成について」『鳥取県立博物館研究報告』第 27 号, pp.19-32
- 星見清晴 2009 「湖山池—その生い立ち—」『鳥取地学会誌』第 13 号, 鳥取地学会, pp.23-36
- 牧本哲雄・井上達也・岩崎康子・岡野雅則 1999 『長瀬高浜遺跡 VIII・園第 6 遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所
- 柳浦俊一 2017 『山陰地方における縄文文化の研究』雄山閣
- 八峠 興・長尾智明・中山寧人・岩崎康子 1997 『長瀬高浜遺跡 VII』財団法人鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所
- 八峠 興 2017 「鳥取・湖山池周辺の中世墓群について（下）—桂見・西桂見・湖山地域ほか—」『鳥取地域史研究』鳥取地域史研究会, pp.3-24
- 横山 聖 2018 「鳥取県内から出土する角形把手付椀の分布とその意味」『半田山地理考古』第 6 号, 岡山理科大学地理考古学研究会, pp.59-71